

# 基本データ型

- プログラム = データ + 手順 (アルゴリズム)
  - データ : メモリ上のある領域 (= アドレス + サイズ)
    - サイズは **変数の型** できまる
- 基本データ型
  - 文字型 (char): 8bit (= 1byte) : 日本語は 2 byte
  - 文字列: char の配列 :

\0: 終端記号

“hoge” (4文字) → {‘h’, ‘o’, ‘g’, ‘e’, ‘\0’} (5 byte)

文字種	文字コード名 (通称)				
	JIS コード	EUC	MSK コード	UTF-8	Unicode
制御コード	00~1F, 7F				00+{00~1F,7F}
ASCII 文字	20~7E (JIS コードでは漢字コードの後で, 1B2842 を前置)				00+20~7E
カナ・記号	A1~DF	8E+A1~DF	A1~DF	EF+Bx+xx	FF+61~9F
記号 かな 漢字	1B2442 以後 {21~74} +{21~7E}	{A1~F4} +{A1~FE}	{81~9F, E0~EA} +{40~7E, 80~FC}	Ex+xx+xx	FF+01~5D, {30,4E~9F} +{00~FF}
補助漢字	1B242844 以後 {21~74} +{21~7E}	8F +{A1~F4} +{A1~FE}	(無し)	( 1110aaaa +10bbbbcc +10ccdddd )	( aaaabbbb +ccccdddd )

+ は接続, x は十六進数の任意の 1 桁, a,b,c,d は 0,1 (二進数 1 桁),  
数字, 大文字は十六進数 1 桁

# 基本データ型 (続き)

## ● 整数

- char (8 bit), int (32 bit), long (64 bit)
- 負の数は2の補数で表現
- 正の数しか扱わない場合はunsigned intなどを使う

## ● 小数

- 固定小数

$$[a_{m-1}a_{m-2}\cdots a_1a_0.b_1b_2\cdots b_n] = \sum_{i=0}^{m-1} a_i 2^i + \sum_{i=1}^n b_i \left(\frac{1}{2}\right)^i$$

例)  $[11.001001]_2 = 2 + 1 + (1/2)^3 + (1/2)^6 = [3.140625]_D$

- 問題：0.2 (10) を2進数に直してみる
  - 有限桁の2進数小数→有限桁の10進数小数
  - 逆は成り立たない

0.2を2進数に直そうとすると

0.2	→	0.4	→	0.8	→	1.6	→	1.2	→	0.4	→	0.8	→	1.6	→	...
0.		0		0		1		1		0		0		1		...
$a_0$		$b_1$		$b_2$		$b_3$		$b_4$		$b_5$		$b_6$		$b_7$		...

無限に続く

$[0.001100110011\dots]$



# 基本データ型 (続き)

- 丸め誤差

$$[0.2]_D = [0.001100110011\dots]_2$$

- 無限に続く数字を計算機では扱えないので切り捨てる  
→ **丸め誤差**が発生する

- 浮動小数点型 (floating point number type)

- 丸め誤差を少なくするために効率よく小数を表現したい
- $[0.2]_D = [0.001100110011\dots]_2$  の最初の0がもったいないので、最上位ビットが1になるまで左シフトする (3つシフト) と、表せる数の範囲が広がる

$$[0.00110011|0011\dots] \rightarrow \text{左に3つシフト} \rightarrow [1.10011001|1\dots]$$

小数部8 bit

$$2^{-3} + 2^{-4} + 2^{-7} + 2^{-8}$$

小数部8 bit

$$1 + 2^{-1} + 2^{-4} + 2^{-5} + 2^{-8}$$

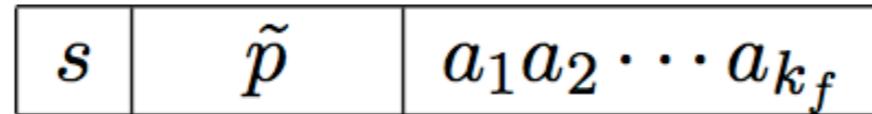
$\times 2^{-3}$  シフト分

このように小数点を固定せず浮動してその位置を指定する表現を**浮動小数点表現**と呼ぶ

# 基本データ型 (続き)

- 浮動小数点の一般的表現

- 先ほどの表現を一般化して ( $a_0 = 1$  は省略)



符号

指数部

仮数部

- 符号は1bit
- 指数と仮数は型 (と処理系) による
  - float:  $1 + 8 + 23 = 32$  bit
  - double:  $1 + 11 + 62 = 64$  bit
- 仮数の表現: biased number, 指数の値に  $2^{k-1} - 1$  を加える
  - float: +127 ( $= 2^{8-1} - 1$ )
  - double: +1023 ( $= 2^{11-1} - 1$ )
- biased number を用いると、浮動小数点の大小比較が、指数部分の2進数表現の大小が一致する (整数の比較器が使える)

# floatの値の範囲

- float型：指数8bit, 仮数23bit

- 指数  $p = 0 \sim 255 \rightarrow$  bias を考えて  $\rightarrow -127 \sim 128$
- $p = 128$  は特別扱い（後述）なので、最大の  $p$  は 127

- となると最大値は  $[1.1111 \dots 111] \times 2^{127}$   
1が23+1個 ( $a_0 = 1$ の省略分)

$$= 2 + \left( \frac{1}{2} + \frac{1}{2^2} + \dots + \frac{1}{2^{23}} \right) \times 10^{127 \log_{10} 2}$$

$$= 3.402823466385 \times 10^{38}$$

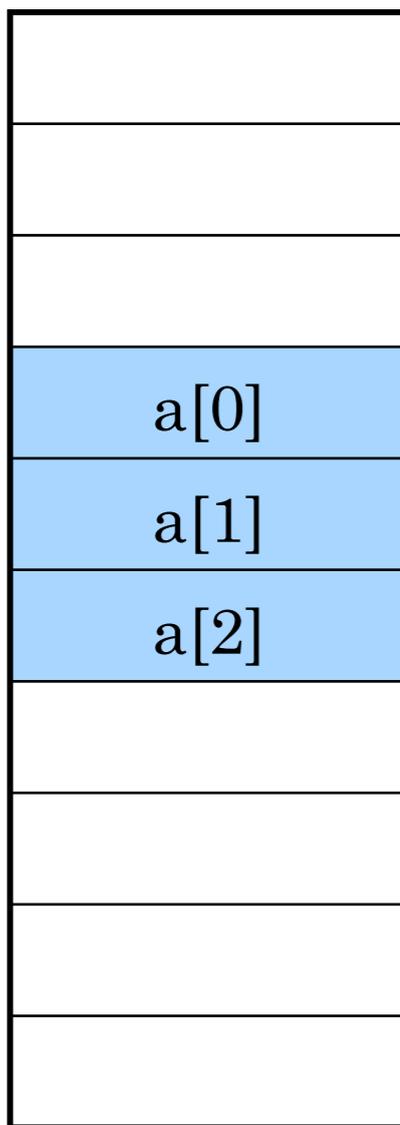
float 型	指数部 8 bit	仮数部 小数点以下 23 桁	十進数表示	p
0 11111111	11111111	11111111 11111111	NaN	128 : 非数
0 11111111	00000000	00000000 00000001	NaN	128 : 非数
0 11111111	00000000	00000000 00000000	Infinity	128 = $2^{128}$ : 無限大
0 11111110	11111111	11111111 11111111	$3.402823466385e+38$	127 < $2^{128}$ : 最大数
0 11111110	00000000	00000000 00000001	$1.701412037429e+38$	127
0 11111110	00000000	00000000 00000000	$1.701411834605e+38$	127 = $2^{127}$
0 11111101	11111111	11111111 11111100	$1.701411428957e+38$	126
0 10000011	00000000	00000000 00000000	16	4 = $2^4$
0 10000010	00000000	00000000 00000000	8	3 = $2^3$
0 10000001	00000000	00000000 00000000	4	2 = $2^2$
0 10000000	1001001	00001111 11011011	$3.141592741013$	1 > $\pi$ : $3.141592653589793$
0 10000000	1001001	00001111 11011010	$3.141592502594$	1 < $\pi$
0 10000000	0101101	11111000 01010101	$2.718281984329$	1 > e
0 10000000	0101101	11111000 01010100	$2.718281745911$	1 < e : $2.718281828459045$



# 基本データ型の前準備（多分復習）

- C言語の授業（プログラミング演習）でやっているはずの事
  - 配列型：同じ型のデータをメモリに連続して配置
  - 構造体：異なるデータをメモリに連続して配置
  - ポインタ：メモリの領域を格納する変数

メモリ



`int a[3];` 利用する際にはサイズを決める必要がある

`a[0] → *a` 配列名は配列の最初の要素へのポインタ

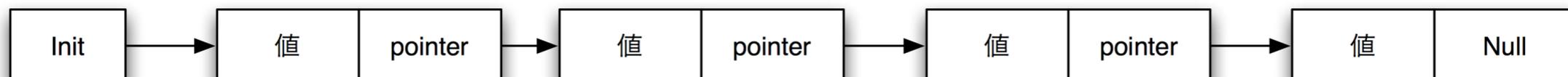
`a[1] → *(a+1)` メモリ上で連続している

# 基本データ型：リスト型

## ● リスト型

- 要素を0個以上並べた型、配列型の拡張
- 配列のように領域をあらかじめ確保する必要がない
  - 柔軟に要素の追加・削除が可能
- メモリ上で連続していなくてもよい
  - 連続していないので、ポインタ演算で値を参照できない
  - 最初の要素から順に参照する

```
struct list {  
    int element;  
    struct list *next;  
};
```



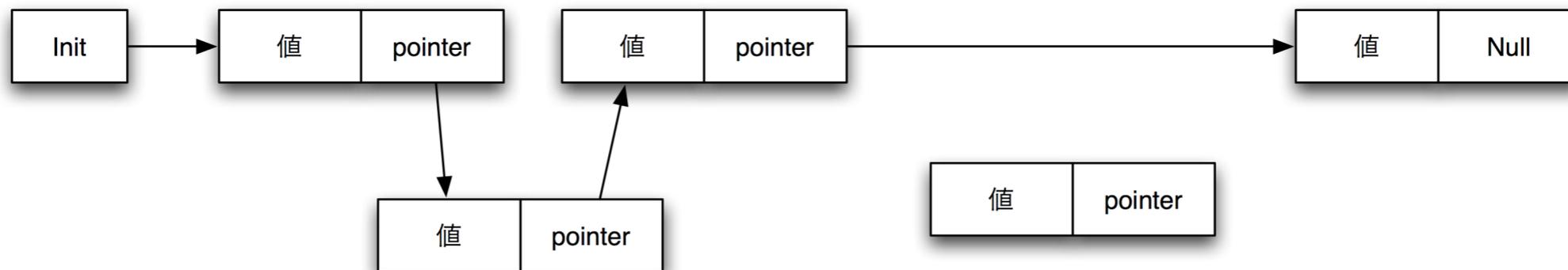
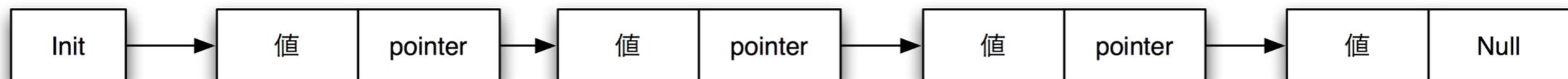
# リストの基本操作

## ● 挿入

- 値を入れる領域を確保 (malloc)
- このアドレスを挿入する箇所のpointerに代入
- 確保した領域のpointerに次の要素のアドレスを代入

## ● 削除

- 削除する前の要素のpointerへ次の要素のアドレスを代入
- 削除する要素の領域を開放(free)



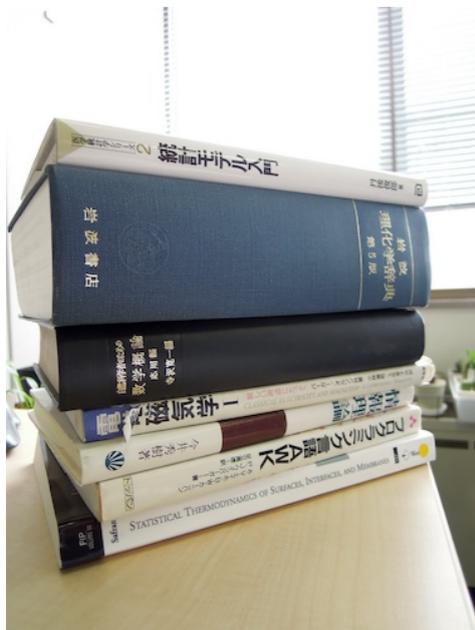
挿入 (Insert)

削除 (Delete)

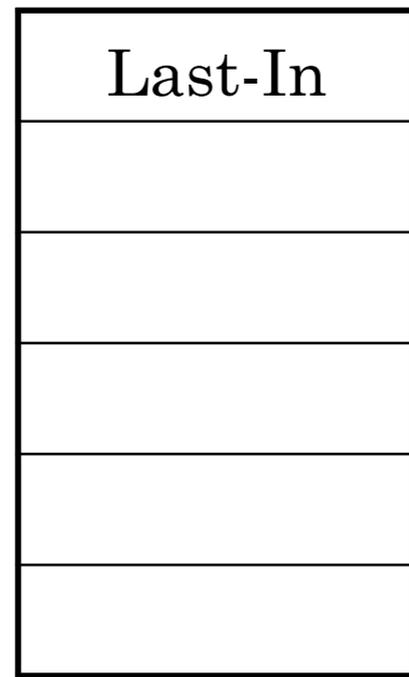
# 基本データ構造：スタック

- スタック (stack): 要素の取り出し・格納が先頭からなされるリスト (Last-In-First-Out: LIFO)

スタックに積む



後入れ先出し  
入れた順でしか出せない



push (値入れ)

pop (値出し)

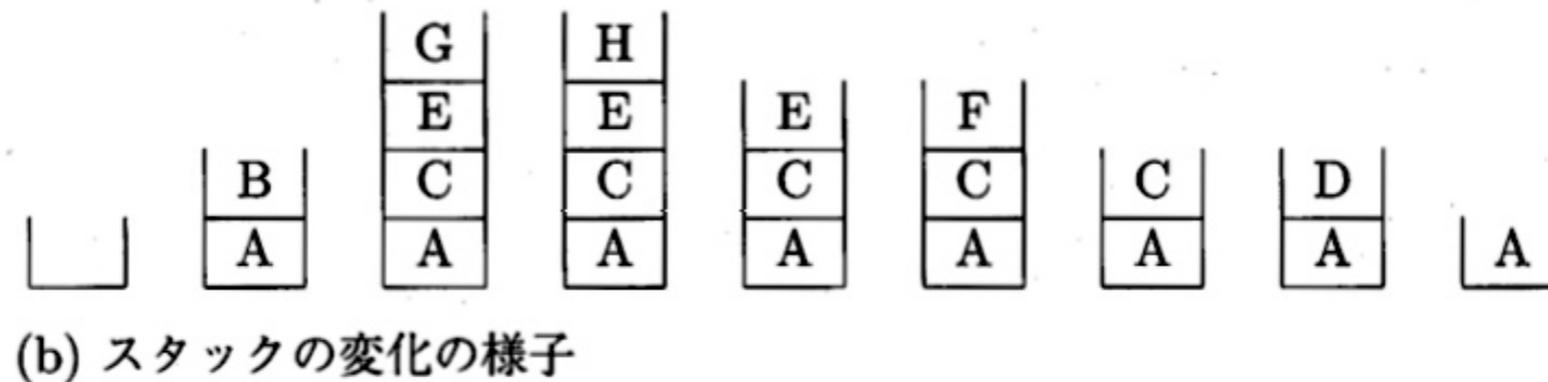
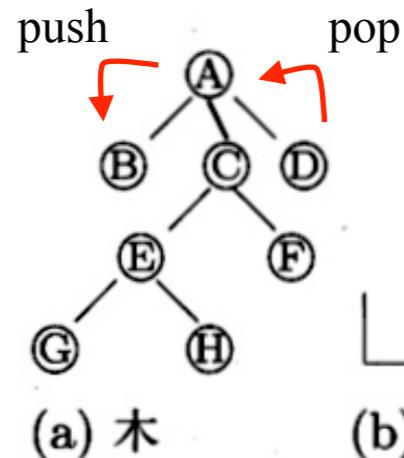


図 6.7 木構造の節点訪問

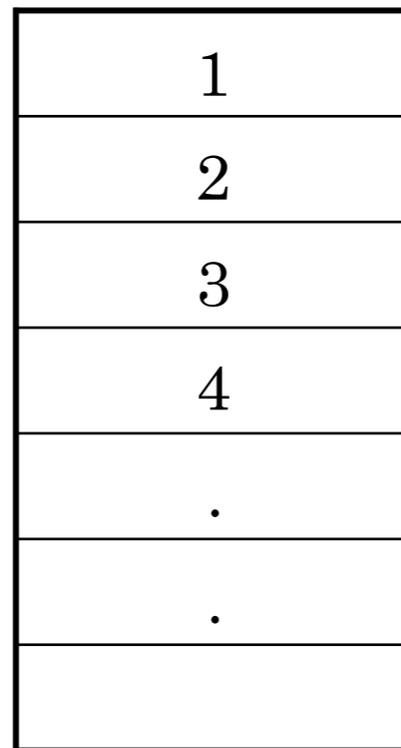
# 基本データ構造：キュー

- キュー (queue) :要素の取り出しが入った順になされるリスト  
(First-In-First-Out: FIFO)

先入れ先出し

先に入れたのから出す

deque (値出し) ←



← enqueue (値入れ)

キューに並べる



1

2

3

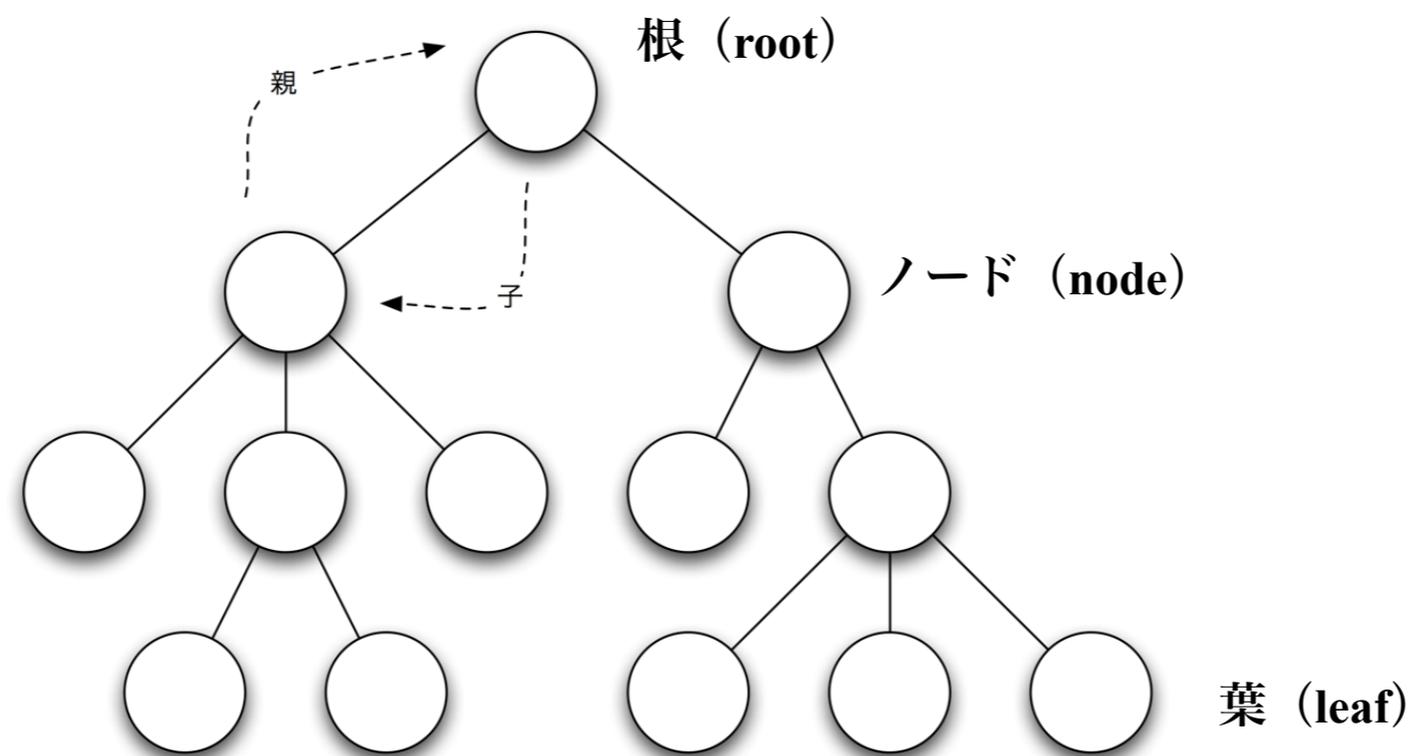
待ち行列 (ATM、レジ、エサ待ちなど) を表現

キュー・スタック共に配列・リストを利用して  
実装可能

最近の言語には最初から型としてある事もある

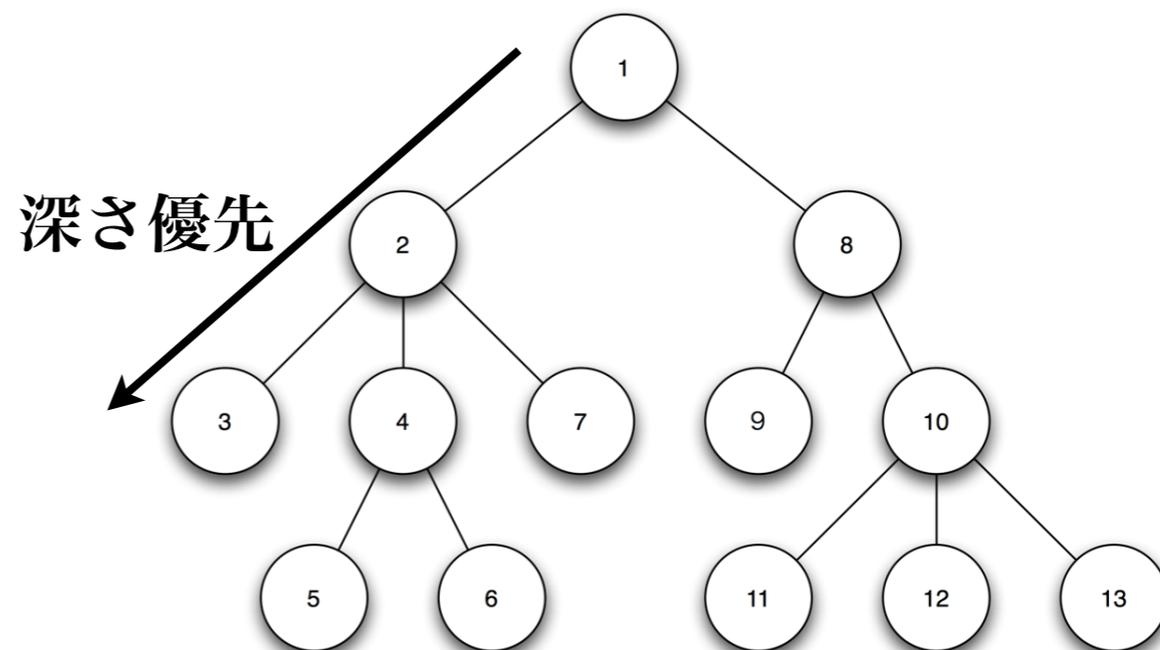
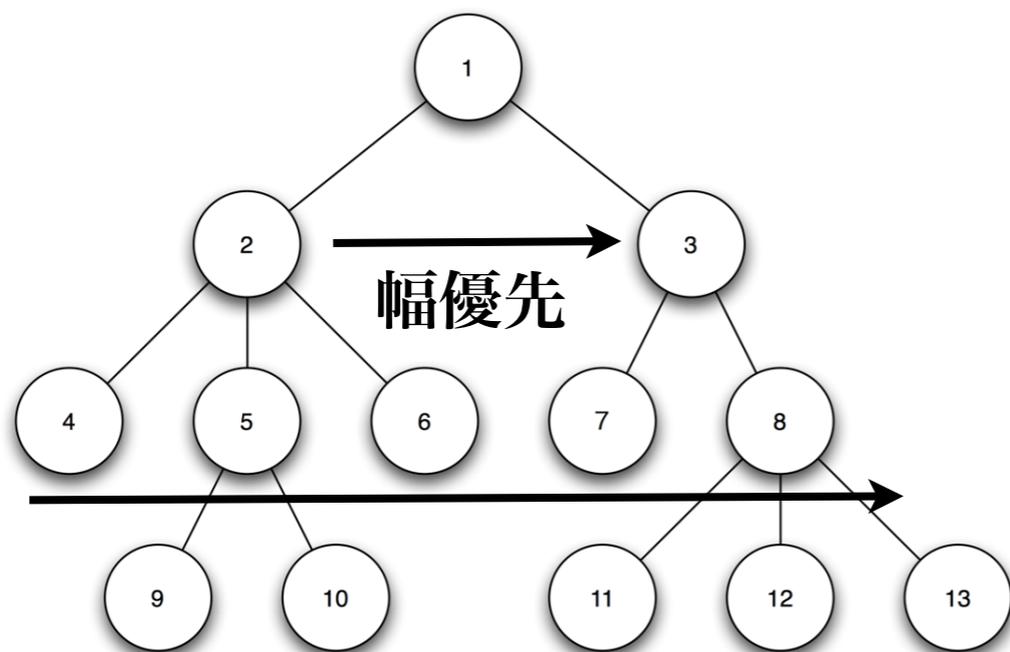
# 基本データ構造：木構造

- 木 (tree) : グラフの一種
  - グラフ : 点 (node) と線 (edge) からなる集合
- 階層的なデータの表現に適している
- 子供が2つだけの木構造を2分木 (binary tree) と呼ぶ



# 基本データ構造：木構造のたどり方

- 木構造データの各ノードをもれなく探索する方法
  - 深さ優先探索 (depth first search)
  - 幅優先探索 (breadth first search)



## ● ラベルの出力順

- pre-order (前順) : 最初の訪問
- in-order (中順) : 2度目の訪問
- post-order (後順) : 全ての子供を回った後

# 数式の木表現

●  $(A + B \times C) \div E - (F \times G + H) = x$

1. = を根とする
2. 優先順位の低い演算子で式を分割

$$(A+B \times C) \div E$$

$$(F \times G + H)$$

3. 各式を同様に分割

$$A + B \times C$$

$$E$$

4. 変数単独になるまで繰り返す

$$A$$

$$B \times C \rightarrow B, C$$

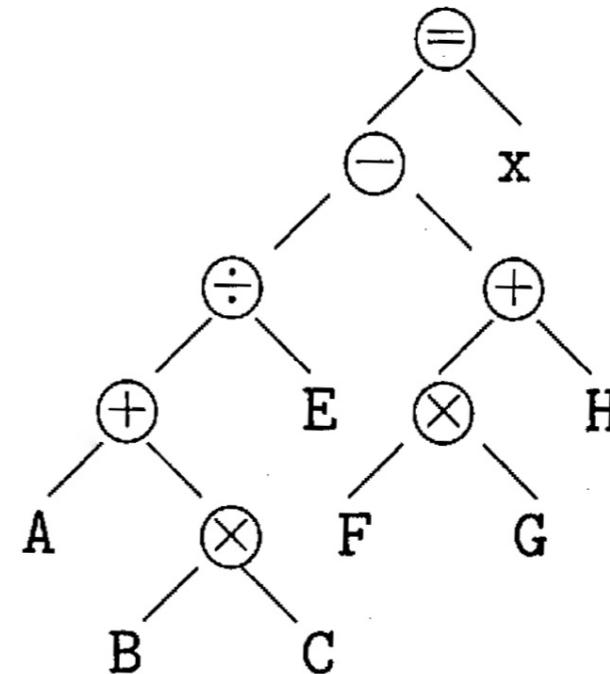


図 6.13 数式の木表現

問題：この数式の木表現を深さ優先＋後順でたどってみよう！

深さ優先＋後順： $A B C \times + E \div F G \times H + - x =$  逆ポーランド表記

ちなみに深さ優先＋中順： $A + B \times C \div E - F \times G + H = x$